季刊 IPUアクション！
岩手県立大学広報誌
67
2016 Spring

在学生のワタシ☆アクション！

「住まい」を通して みんなの暮らしを支える人に

特集01 復興から未来をつくる若いチカラを育てていく！
特集02 キャリアセンターの就職支援
ラボ☆アクション！
キャンパスフレンズ・えっちょます
KENDAI NEWS
ケンダイ広報局
卒業生のワタシ☆アクション！

岩手県立大学
Iwate Prefectural University

季刊 IPUアクション！
岩手県立大学広報誌
67
2016 Spring

卒業生のワタシ☆アクション！

助産師として母子を支え、命の誕生に寄り添っていく。

岩手県立大学
Iwate Prefectural University

This is My Action!

STUDENTS Voice

自分のやりたいことや好きなことを見つけ、
その実現に向かって頑張っている学生たちがいる。
彼らが何を思い、どんな行動を起こしているのか。
一人ひとりの「ワタシアクション！」をご紹介しよう。

住居分野の科目はどれも楽しいけれど、
専門用語を覚えるのが大変、と佐々木さん。
一番好きなのは製図の授業。

私は将来、建築など「家」に関わる仕事に就きたいと思い、盛岡短期大学部生活科学科で住居について学んでいます。

きっかけは、中学2年生のときに経験した東日本大震災。私の地元・大槌町は津波による大きな被害を受けました。実家は幸い無事でしたが、周りには家を失くし、仮設住宅で暮らす人がたくさんいます。「家」があれば、みんな毎日安心して暮らせる。家をつくる人になりたいな、と思いました。

高校生になり進路について考えたとき、姉が通っていたこの学科で住居に関する分野を学べること、所定の科目を履修すれば二級建築士の受験資格も得られることを知り、私も通いたい、と進学を決めました。

今は1年生なので、設計図の書き方や住宅の構造など、基礎的な知識・技術の授業が中心。覚えることが多く大変ですが、先生が親身になって教えてくれますし、専門分野を学ぶことの充実感もあります。勉強のプラスアルファになればと思い、自主的に「色彩検定」を受験し2級に合格。一番の目標は二級建築士合格ですが、インテリアコーディネーターなどほかの資格も取得して、住居に関する幅広い知識を身につけたいと思っています。

また、去年の夏は県大チームとして「盛岡さんさ踊り」に参加しました。振りを覚えるのは大変だったけれど、楽しかった！練習を通じて違う学部の人と知り合い、人間関係も視野も広がりました。残りの学生生活も、今できることに精一杯挑戦していきたいです。

ワタシ☆アクション！

盛岡短期大学部　生活科学科１年

佐々木 敦子 Atsuko Sasaki

1996年生、大槌町出身。大槌高校を卒業後、2015年に岩手県立大学盛岡短期大学部生活科学科生活科学専攻に入学。二級建築士合格を目標に住居分野を学ぶほか、衣造形の科目も履修。「住居は真剣に、衣造形は楽しく」がモットー。入学と同時に一人暮らしを始め、自炊や洗濯に奮闘中。休日には家でのんびりするのが好きだという。

...See You Next Action!

田中先生の代表著書と、方言を知るための資料（カルタやお土産）

ラボ☆アクション！

先生たちの研究の流儀

地域のシンクタンクであり、多彩な学部を擁する岩手県立大学には、個性豊かな先生がたくさんいる。彼・彼女らがどんな想いを抱き、日々どんな研究に取り組んでいるのか。その横顔に迫ってみたい。

方言は、地域それぞれの気候や地形、暮らしから生まれる。知れば知るほど、興味が尽きない。

「方言は、その土地の風土や信仰、気質と深く結びついていて、独自の言語体系と、細かいニュアンスも伝えられる表現の豊かさを持っています。地域性を排除した共通語で育った私には、とても魅力的に感じました」

子どもの頃から言語の地域性に興味を持ち、国語学を学びたいと東京都立大学に進学。そこで出会った「付属語アクセント」が、田中先生を研究の道へと導いた。

「当時の日本語アクセント研究の主流は、『月』『きれい』など、単独で文節をつくれる自立語が対象。『（月）が』『（きれい）です』といった付属語アクセントの研究は遅れていると知り、やってみようと思いました」

1985年に研究を開始。長野、東京、京都、鹿児島と調査に取り組むなか、1996年、岩手県立大学宮古短期大学部に赴任した。

「宮古の言葉は特徴的なアクセントを持っていると、1955年に言語学者の柴田武先生が論文発表して以来、宮古は方言やアクセントの研究者が注目してきた土地。しかし研究の進展状況などから、長期にわたる研究はされていませんでした。そういう場所に縁あって来たのだからと、宮古での言語調査は特に時間をかけました」

教員を続けながら2000年に社会人研究者として東北大学文学研究科に進み、これまでの研究を論文にまとめた田中先生。それをもとに出版した『付属語アクセントからみた日本語アクセントの構造』（おうふう刊）が、2006年「第34回金田一京助博士記念賞」を受賞。言語研究における権威ある賞で、金田一博士の故郷・岩手で初の受賞者となった。

現在も付属語アクセントの研究を続けながら「方言みやげ」「昔語り」「方言音声の機械認識」など多様な切り口で言語研究に取り組み、出版社・三省堂のウェブサイトで「地域語の経済と社会」をテーマにしたリレー連載も受け持った。短大では教養科目として言語学の授業を担当し、卒業研究も指導。「方言の魅力を伝えたい」という田中先生のゼミは、毎年方言や地域の研究に興味を持つ多くの学生が集まる。

「宮古短大の学生は積極的に地域に貢献したいという思いを強く感じます。地域性と密接につながっている方言は、その土地を深く知るカギにもなる。そんな方言の奥深さを、一緒に楽しんでほしいと思っています」

卒業研究に取り組むゼミの学生にアドバイス。

DATA

宮古短期大学部
田中 宣廣（のぶひろ） 教授

東京都出身。専門は日本語学、社会言語学。東京都立大学大学院人文科学研究科修士課程修了。1996年岩手県立大学宮古短期大学部に着任、現在は経営情報学科長、宮古短期大学部学生赤十字奉仕団（2009年設立、団員55名）の顧問も務める。教壇に立ちながら東北大学文学研究科博士課程を修了、その研究で「第34回金田一京助博士記念賞」を受賞した。研究に没頭する日々を送る一方、結婚記念日にちなみ毎月20日には必ず家族で外食するという、家庭的な一面も。

復興から未来をつくる若いチカラを育てていく！

震災当初から岩手県立大学は、被災地の大学として様々な支援活動を展開し、沿岸の復興に寄り添ってきた。その中でも大きな柱として取り組んでいるのが、「いわての教育及びコミュニティ形成復興支援事業」である。これは被災地のコミュニティ支援と学習支援、ボランティアに携わる人材育成に取り組む活動だ。震災から５年の節目に、この事業に焦点を当て、本学の復興支援の歩みを総括してみたい。

学生を対象とした「コミュニティ支援力養成研修会」の様子。昨年3月は2014年の広島土砂災害の地で学生の役割を考えた。

「いわてGINGA-NET」プロジェクトに参加した学生は、支援活動に入る前に必ず被災地を視察し、現状を把握する。

昨年９月に発生した関東・東北豪雨災害で被害を受けた栃木県と茨城県で、「風土熱人R」の学生有志が支援を行った。

学習支援を行う「学びの部屋」は、陸前高田市、大船渡市、釜石市、宮古市の４市で実施。学校や公民館などを利用している。

本学と「子どものエンパワメントいわて」が実施する「学びの部屋」では、子どもに寄り添いながら学習を支援。将来の進路をサポートしている。

震災は学生たちの背中を押し、新たな学びを与えてくれた

平成23年3月11日、岩手を襲った東日本大震災。発生当初、県立大学では直ちに災害復興支援センターを立ち上げるなど、具体的な手だてとタイミングを計っていた。一方、被災地には全国からボランティアや調査団が集結。受け入れ態勢が整っていない現地は混乱し、被災者への負担が増しつつあった。

このような状況下で、本当に必要とされる支援を行うため、震災から3日後にいち早く立ち上がったのが学生ボランティアセンターである。活動の中で学生たちは被災地に若手ボランティアが不足していることを知り、ＮＰＯ法人等の協力を得て「いわてGINGA-NETプロジェクト」を発足。支援に出向きたくとも宿泊や移動に不安を持つ全国の学生ボランティアを受け入れ、被災地に派遣する仕組みをつくったのである。

宿泊・活動拠点を住田町の五葉地区公民館に置き、平成23年4月27日から5月8日まで、最初のプロジェクトを実施。全国から13大学延べ512名の学生が滞在し、沿岸部でボランティア活動を行った。その後は、学生たちの長期休暇を利用して、夏休み・冬休み・春休みに支援活動を実施。これまで延べ1万6000人以上の学生が全国から参加し、応急仮設住宅を中心としたコミュニティ支援活動を行っている。

学生たちの支援活動をサポートし、復興を担う人材へと育てていく

震災は多くの人々の環境を大きく変えた。特に子どもたちは、学校の運動場が仮設住宅となったり放課後の遊び場がなくなるなど、居場所を失った。そんな子どもたちをケアし、安心して学べる場をつくるために、本学では一般社団法人「子どものエンパワメントいわて」と協働し、学習支援を通じて夢の実現を応援する取り組みをスタート。このプロジェクトを「学びの部屋」と名付け、平成23年11月から学習支援を行っている。

子どもたちに寄り添うのは、地元の学習支援相談員と本学をはじめとした学生ボランティア。現在は、沿岸部の4市で実施しており、地域のニーズを踏まえながら「学びの部屋」を徐々に増やしている。

先に紹介した「いわてGINGA-NETプロジェクト」は、それまでの活動を引き継ぐ形で、平成24年2月に学生有志が中心となりＮＰＯ法人「いわてGINGA-NET」を発足。一方、「子どものエンパワメントいわて」も、在学中から活動に関わっていた学生が、卒業後に理事として参加。実質的な運営責任者として活動を支えている。

本学では、このような支援活動へのサポートを通じて、復興をけん引する学生ボランティアを育成。彼らの主体性を育むことによって、復興から地域の未来を担う人材へとつなげていきたいと考えている。

特集 01 Features01 復興に関わる教育・コミュニティ形成支援

平成23年３月⇒平成28年３月　県立大学の主な復興支援活動

平成23年3月11日14時46分
東日本大震災発生（滝沢市：震度６弱、宮古市：震度５強）

［滝沢キャンパス］帰宅できない学生110名、教員11名が大学に宿泊、地域住民にも施設開放（11日～13日講堂に延べ221名）、自家発電で対応

［宮古キャンパス］帰宅できない学生１名が寮生14人と学生寮に宿泊、河南地区避難所に男子学生２～３名が避難

３月14日　学部長等関係者の会議開催
学生ボランティアセンターによる災害学生ボランティアセンター開設

３月16日
「東北地方太平洋沖地震・地震対策本部」設置

３月16日～４月15日
［宮古キャンパス］体育館を警察の宿泊所に提供

［平成23年度］

４月１日　被災学生等への経済的支援として授業料等の減免等を実施（継続中）

４月５日　「岩手県立大学災害復興支援センター」設置

４月5・7・8日　中村慶久学長（当時）が県内被災11市町村と２広域振興局を訪問

４月15日　中村学長から全教職員に対するメッセージ

４月27日～５月18日　いわてGINGA-NETプロジェクト

４月28日　地域政策研究センターに「震災復興研究部門」を設置

５月14日～　学生ボランティアによる仮設住宅コミュニティ支援活動

６月19日～12月17日
災害復興支援センターのボランティアバス運行（５回）

８月３日～９月20日　いわてGINGA-NETプロジェクト“夏銀河”（継続中）

９月23～24日　オハイオ州立大学と連携し、大槌町でボランティア活動

10月16日　県内の被災高校生を対象に震災特別選抜入試を実施（継続中）

11月～　学生ボランティアによる小中高校向け学習支援・居住支援（継続中）

12月28日～翌１月４日　いわてGINGA-NETプロジェクト“冬銀河”（継続中）

３月12～26日　いわてGINGA-NETプロジェクト“春銀河”（継続中）

３月26～28日　第1回コミュニティ支援力養成研修会を開催（以降、県内外で全8回開催）

［平成24年度］

６月19日～翌２月23日
ボランティアバス運行（８回）

７月7日～翌３月28日　「復興」をテーマに岩手県立大学公開講座・滝沢キャンパス講座及び地区講座開催

９月21～23日　オハイオ州立大学と連携し、宮古市と大槌町でボランティア活動

12月20日　宮古市に「岩手県立大学復興サポートオフィス田老」を設置

［平成25年度］

4月28日～11月16日　ボランティアバス運行（15回）

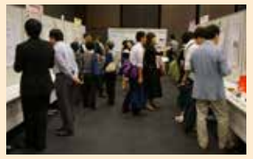
5月11日　釜石市に「岩手県立大学復興サポートオフィス釜石」を設置

7月13～14日　第4回コミュニティ支援力養成研修会を兵庫県立大学で開催

7月27日～翌２月22日　「復興」をテーマに岩手県立大学公開講座・滝沢キャンパス講座及び地区講座開催

８月17・24・31日　「三陸復興キャラバン出前！ブログ教室」を開催（釜石市・宮古市・普代村）

９月21日



「震災復興・地域貢献」をテーマに岩手県立大学成果発表会を初開催

９月27～29日
オハイオ州立大学・本庄国際奨学財団・高田高校と連携し、大槌町、陸前高田市などでボランティア活動

［平成26年度］

４月20日～翌３月22日　ボランティアバス運行（14回）

6月16日　地域政策研究センター「東日本大震災津波からの復興加速化プロジェクト研究」開始

７月26日～11月24日　復興の加速化に向け岩手県立大学公開講座・滝沢キャンパス講座及び地区講座開催

９月26～28日

オハイオ州立大学・本庄国際奨学財団・大槌高校と連携し、大槌町、陸前高田市などでボランティア活動

10月12～13日　第6回コミュニティ支援力養成研修会を宇都宮大学で開催

２月20日　本学地域連携本部・静岡県立大学の主催で「地域防災情報シンポジウム」を開催

3月8～9日　第7回コミュニティ支援力養成研修会を広島修道大学で開催

［平成27年度］

4月29日～翌1月30日　ボランティアバス運行（10回）

９月25～27日　オハイオ州立大学・本庄国際奨学財団・高田高校と連携し、大槌町、陸前高田市などでボランティア活動

2月20日　いわての教育及びコミュニティ形成復興支援シンポジウム

＜学生による主な支援活動＞

◎学生ボランティアセンター
＊災害学生ボランティアセンター開設
＊陸前高田市、釜石市災害VCの設置運営支援
＊いわてGINGA-NETプロジェクト立ち上げ
＊仮設住宅コミュニティ支援活動

＊内陸避難者を大学に招いた大学見学ツアー
＊山田町民と滝沢市民との交流事業

◎宮古短期大学部学生赤十字奉仕団
＊被災者支援活動・独居高齢者への訪問活動
＊児童・生徒への学習支援
＊宮古市「街なか復興市」など復興関係イベントの補助

◎復興girls&boys
＊被災地企業の商品販売や商品開発による被災地の状況や魅力発信

◎カッキー's
＊看護学部生有志による被災者への健康支援活動

◎水ボラ
＊学生と教員による飲料ペットボトル配布活動

◎うめぇもん届け隊実行委員会
＊全国の大学と連携した被災地の商品販売・魅力発信活動

◎はまぎく
＊おでんせ宮古プロジェクト

◎しまもぐプロジェクト
＊オリジナルボールペンを開発し、売上の一部を被災地支援のために募金

※そのほか、各学部でも専門分野を活かした多彩な復興支援活動・研究を行っている。

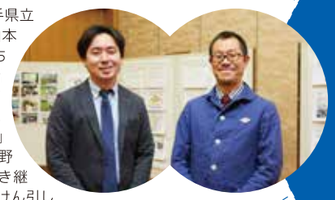
岩手県立大学の
復興支援活動の
取り組みはこちら→

岩手県立大学
本学の支援活動をリードする学生たちや教員、活動をきっかけにつながりが生まれた人たちに話を聞いた。

佐々木 喜之さん
住田町教育委員会事務局生涯学習係主任兼社会教育主事
住田町内の五葉地区公民館を「いわてGINGA-NET」の活動・宿泊拠点として提供。役場の窓口として学生たちの支援活動をバックアップした。「学生を応援することが我々の大事な復興支援。学生と地元住民との交流をもっと広げていければ」と今後の展開を期待している。

高知県立大学・イケあい地域災害学生ボランティアセンター
震災をきっかけに発足し、高知県からボランティアに参加。その後も地元で学生ならではの自由な発想で地域やNPOと連携してユニークな防災活動に取り組んでいる。「私も岩手で支援活動を行いましたが、被災地を肌で感じることの大切さを実感。学生が中核となって災害支援のリーダーとなる人材を育てることが目標です」と、代表の小林美輪さん（手前左）は強調した。

山本 克彦・日本福祉大学准教授（右）
菅野 道生・岩手県立大学講師（左）
平成26年３月まで岩手県立大学に勤務していた山本准教授は、震災時、いち早く学生たちと支援活動に乗り出し、「いわての教育及びコミュニティ形成復興支援事業」の立ち上げを主導。菅野講師はその流れを引き継ぎ、大学の支援活動をけん引しながら県内のボランティアネットワークづくりもサポートしている。



川原 直也さん
（総合政策学部）
「風土熱人R」学生ボランティア
「風土熱人R」で活動する傍ら、「いわてGINGA-NET」にも参加。その時に生まれた全国の学生とのつながりを活かし、被災地の商品を販売する「うめぇもん届け隊」を組織。「もっと多くの人と交流を広げ、行政と民間をつなぐ役割を果たしていければ」と話す。

小原 裕也さん　釜石市社会福祉協議会
岩手県立大学社会福祉学部の卒業生で、在学中は「いわてGINGA-NET」のメンバーとして活躍。「支援活動をする中で生まれた人とのつながりが、自分の財産になった。社協の一員という立場から、学生たちの思いを形にできるようなサポートをしていきたい」と話す。

宮本 大毅さん（総合政策学部）「子どものエンパワメントいわて」学生ボランティア
被災地の子どもへの学習支援を行う「学びの部屋」のコーディネーターとして、支援活動に参加。「大切なのは指導ではなく、子どもの気持ちに寄り添うこと。学校のこと家族のことなど、まず話をじっくり聞くことから関係をつくっていきました」と話す。

被災地の大学としての経験を今後の災害支援のモデルケースに

これまで本学では「いわての教育及びコミュニティ形成復興支援事業」において、「いわてGINGA-NET」のコミュニティ支援や「子どものエンパワメントいわて」の学習支援をサポートすると同時に、平成24年から全国の学生を対象とした『コミュニティ支援力養成研修会』を開催してきた。

この研修会は、これまでの被災地での活動や復興に取り組む姿に学び、今後起こりうる自然災害に備え、防災・減災活動を広げていくことが狙い。1回目の岩手県にはじまり、愛知県、兵庫県、高知県、栃木県、広島県と7回の研修を重ね、8回目は再び岩手県へ。さらに5年間の総括として「いわての教育及びコミュニティ形成復興支援シンポジウム」を開催した。

このシンポジウムでは、5年間の取り組みと成果を報告し、今後の課題と展望、地域と学生をつなぐ大学の役割について議論した。ボランティア活動に取り組む学生や、岩手での復興支援の経験を地元の防災活動に活かす高知県立大学の学生なども参加。それぞれの立場から活動を報告したほか、復興支援に携わる4名のパネリストたちによって、大学による支援の重要性や人材育成の成果などが話し合われた。

未曾有の震災を経験し、継続して支援を行ってきた被災地の大学として、本学が果たす役割は大きい。これまでの経験と実績が、各地で災害に向き合う大学や学生にとっての基軸となりうるからだ。実際、平成26年の広島県の土砂災害や平成27年の栃木県の水害時には、岩手での支援を体験した学生たちが力を発揮した。今後も変化する被災地のニーズをとらえ、“生きた事例”を提示し続けることが、災害時の大学のあり方を示す道標となるはずだ。

２月に開催されたシンポジウムで、これまでの支援活動の様子をパネルで説明する卒業生。

シンポジウムでは、「いわてGINGA-NET」「子どものエンパワメントいわて」「岩手県立大学」の３つの活動報告が行われた。

復興支援に携わる４名のパネリストによって、大学による支援や人材育成の成果などが議論された。

Campus Friends

Vol.7

えっちょます

県立大学のサークルや同好会、
学生会活動を紹介する「キャンパスフレンズ」。
生き生きと活動する学生たちの様子をチェックしてみよう。

自分たちで考えた企画を、みんなで形にするのが面白い。

〝えっちょます〟という言葉を聞いたことはあるだろうか。これは、岩手県北地域の方言で「一緒になる」「団結する」という意味の動詞。なかなかユニークな響きの言葉だが、これ、岩手県立大学生協学生委員会の団体名なのである。

大学生協とは、キャンパス内で店舗や食堂を運営し、学生や教職員に商品や食事、事故・病気の際の保障など、様々なサービスを提供する協同組合のこと。学生・院生・教職員から出資金を募り、その資金でより良い大学生活をサポートする活動をしているのだ。この大学生協に、学生の声を反映させるために組織されたのが、学生委員会『えっちょます』。生協職員たちと協力し合いながら、様々な活動に意欲的に取り組んでいる。

「私たちが主催する一番大きなイベントは、新入生のためのウェルカムパーティー。大学生活に関する情報を紹介したり、交流を広げるレクリエーションを行ったり、企画から進行まですべて自分たちで手がけています」と、リーダーの室崎綾果さん(ソフトウェア情報学部・2年)。新入生約400名を4名の学生だけで仕切るため準備も手間もかなりかかるが、企画を形にする楽しさがあるという。

他にも新入生向けのガイドブックの制作、食堂・売店の装飾やメニュー開発、ミニイベントの企画、生協弁当の資源回収など、幅広い活動があるが、なかでも大いに刺激になるというのが他大学との交流だ。「昨年の夏休みに生協セミナーに参加。他大学の活動を学んだり、学生同士で情報交換をしたり、とても勉強になりました」と、室崎さんは振り返る。

間もなく新入生を迎える4月、ウェルカムパーティーの準備も佳境に入ってきた。新入生に喜んでもらうだけでなく、自分たちと〝えっちょます〟してくれる仲間も募りたいと考えている。

『えっちょます』では、週1回集まってミーティングを行っている。この日のテーマは4月に開催するウェルカムパーティーの企画。

DATA

県立大学生協学生委員会・えっちょます

平成22年に、大学生協を補佐する学生委員会として発足した。現在の委員数は4名。生協職員と連携しながら様々な活動を展開している。学生が発案したユニークなイベントとしては、食堂で出しているソフトクリームの総選挙(略してSFT総選挙)や、本の感想を書いたコメントカードを集めて割引券をもらう読書マラソンなど。活動日は毎週月曜日、お昼休みに集まってミーティングを行っている。

特集 02 Features02 キャリアセンターの就職支援

目指す未来に寄り添うサポートを！

早い段階から意識啓発を行い、学生一人ひとりが将来を考える道筋を支援するキャリアセンター。地域での活躍を目指す公務員の対策強化をはじめ、それぞれが希望する未来へ進めるよう様々な取り組みを行っている。

平成28年１月に行われた「公務員進路ガイダンス」の様子。岩手県職員に採用された総合政策研究科の野中里菜さんに学生たちが様々な質問を投げかけた。

公務員試験対策に力を入れ、地域での活躍を志す学生を支援。

「公務員を目指すと決めてから、まず相談にいったのがキャリアセンター。今後どのように勉強していけばいいのか、アドバイスを受けました」と話すのは、昨年秋に岩手県職員に採用された野中里菜さん（総合政策研究科・博士前期課程2年）。マスコミ志望だった野中さんが、進路変更を考え出したのは大学4年になってから。自ら立ち上げた学生団体「復興girls」の活動に携わる中で、被災者の方々が行政を頼りにしている様子を見て、県職員を志すようになった。

しかし、決断した時期が遅かったためキャリアセンターの職員と相談し、1年後の公務員試験を目指し、計画的に勉強を進めていくことに。独学では難しいと考えていた野中さんは、生協が主催する公務員試験対策講座を受講して、試験に臨んだという。「公務員としてやりたいことを明確に持ち、試験対策に本気で取り組むことが大事」と、野中さんはアドバイスする。

このように県立大学では、公務員試験対策にも重点を置き、大学1・2年次から公務員進路ガイダンスなどを実施。平成26年度から新たな公務員試験対策講座を開講し、集中して試験勉強に取り組める環境を整えている。その結果、平成27年度の公務員内定者数は前年度比で約6割の伸び率となっている。

早い段階から意識啓発を行い、学生が将来を考える土台を作る。

昨年から選考期間が2ヶ月繰り上がり、3月～6月が就職活動の本番といわれる今年の就職戦線。平成27年春の本学の就職率を見ると、4大生は98.4％、盛岡短大生は98.6％と高い数値に達しているが、「売り手市場」といっても安心はできない。大切なのは、日頃から自分の将来を考え、自分を磨く学びを意識すること。そのために本学では、1年次から意識啓発の機会を設け、段階的な就職支援を行っている。

サポート役を担うのは各学部の教員のほか、キャリアセンターが就職全般の支援を担当。1年次から就職を考える冊子「コンパス」の配布をはじめ、1～3年次を対象とした公務員試験対策講座、学生の職業観や人生観を育むキャリアプランニングセミナーなどを実施。また、県内企業バスツアーや実際の職場を体験できるインターンシップの促進のほか、個々の就職相談にも対応している。

学生が幅広く業界や仕事を知り、将来を選択するお手伝いをするのがセンターの務め。地域にも目を向ける機会を広げながら、一人ひとりの希望に添った丁寧なサポートを行っている。

3月に行われた合同企業説明会の様子。多くの企業が集まり、学生は熱心に話を聞いた。

仕事の現場を実際に見ることを目的に、1月に行われた地元企業見学バスツアー。※(株)カガヤの工場見学の様子

［キャリアセンターの支援内容］

■情報提供
求人や企業の情報、先輩の就職活動の記録などの閲覧のほか、パソコンでの求人検索、企業の来学情報提供、就職関連書籍の貸出などを行っている。

■個別相談
エントリーシートや履歴書の書き方、就職活動の進め方へのアドバイスをはじめ、就職への不安や悩み相談にも対応している。

■面接練習
個別面接や集団面接の練習に対応。集団討論やプレゼンテーション面接の指導・アドバイスも行っている。

■インターンシップ
県内企業はもとより、学生の出身県での受入先もマッチングできるよう、東北エリアの他大学と連携し、インターンシップ体験を後押ししている。

■就職ガイダンス
業界・企業研究、筆記試験や面接対策など、実践的な講座を実施している。

■合同・個別企業説明会
学内において企業の人事担当者による説明会を実施している。

［就職支援専門員からのメッセージ］

目標を定めず「なんとなく就職活動」を始めても意味はありません。大事なのは、自分の強み・弱みを理解し、将来何をしたいのかを明確にすること。その上で志望企業をしぼり込んだ方が良い結果につながります。とにかく一人で悩まず、私たちに相談してみてください。一緒に考えながら、一人ひとりに合ったベストな道をサポートします。

庄司 智弥さん
（学生支援室就職支援グループ・就職支援専門員）

KENDAI NEWS

岩手県立大学のニュースやイベントなど、旬のトピックスをチェック！

平成27年度「学長奨励賞」授与式

2月23日に平成27年度の学長奨励賞の授与式が行われました。学長奨励賞は学業・研究活動、社会活動等で顕著な功績をおさめた学生に授与される賞です。今年度は学業・研究での功績はもちろんのこと、起業やボランティア活動、サークル活動、国際交流など、様々な分野で活躍した19組の学生及び団体に授与されました。

看護学部
伊藤 和也
第17回日本在宅医学会もりおか大会にて「人工呼吸器装着のALS独居患者の在宅生活を支える学生システム」を発表

社会福祉学部
庄司 文仁
オープンキャンパス等で学童等託児活動（遊びボラ）を行うリーダーとして活躍

ソフトウェア情報学部
赤平 かなえ
第15回ビジュアル情報処理研究合宿にて「最優秀賞」を受賞

ソフトウェア情報学研究科・ソフトウェア情報学部
古舘 達也・工藤 大希
学生ベンチャー「Blue IPU」を起業し、情報処理学会第77回MBL研究会で「研究会奨励発表」を受賞 他

総合政策学部
菊池 のどか
東日本大震災の被災体験から、県内外での学校等での講演、外国の防災教育動画への出演など、防災啓発活動を数多く実施

川原 直也
公立大学ネットワークの本学企画メンバー、いわてGINGA－NETのキャストリーダー、ボランティアサークル風土熱人Rの代表など、多岐にわたり活動

盛岡短期大学部国際文化学科
石川 緋香里
内閣府募集の平成27年度次世代グローバルリーダー事業「シップ・フォーワールド・ユース・リーダーズ」試験に合格

盛岡短期大学部生活科学科
CAD検定受験者
第61回建築CAD検定試験（3級）にて受験者20名全員が合格、「最優秀団体賞」を受賞

宮古短期大学部経営情報学科
豊峯 榛夏
宮古市内中学校の特別学級において、授業のサポートや不登校支援教室への支援等のボランティアを継続的に実施

ダブルダッチサークル
ROPE A DOPE
Double Dutch Delight North大会のOPEN部門で優勝。ダブルダッチの普及啓発のボランティアのほか、イベント出演なども多数

水泳部
村上 勇輝
第8回北部学生選手権水泳競技大会にて、男子100m平泳ぎで第1位

須郷 真衣
第30回北部地区国公立水泳競技大会にて、女子100m平泳ぎで第1位、女子200m平泳ぎで第1位

スケート部
濱田 芽生子
第70回国民体育大会冬季大会「2015ぐんま冬国体」にて、スピードスケート成年女子1000mで6位入賞、2000mリレーで5位入賞

太田原 春菜
第88回日本学生氷上競技選手権大会Bクラスにて、フィギュア部門2位、団体3位

将棋部
小山 怜央（※学長奨励賞特別賞）
第69回全日本アマチュア名人戦にて優勝、アマ名人になる 他

中川 滉生
第90回東北学生将棋大会個人戦にて優勝、第59回東北六県将棋大会先鋒戦において優勝

さんさ踊り実行委員会
盛岡さんさ踊りに参加し、6年連続最優秀賞を受賞

被災地支援プロジェクト参加学生
平成27年9月関東・東北豪雨で被災した栃木県鹿沼市や茨城県常総市で災害ボランティア活動を3期にわたって実施

ソフトウェア情報学部・社会福祉学部
平野 竜・小笠原 果美
サウジアラビア王国国費留学生モノづくり人材育成プログラムの一環である「PIUS模擬授業プログラム」にて、留学生が一関工業高等専門学校で授業を受けた際、両名がTAとして協力し、サウジアラビア大使館文化部から感謝状を授与

人事情報

[新任副学長・学部長等]

副学長（平成28年4月1日付け）

副学長（企画）　石堂　淳 ※企画本部長と兼務

学部長

社会福祉学部長　狩野　徹
ソフトウェア情報学部長　猪股俊光
総合政策学部長　吉野英岐
盛岡短期大学部長　千葉俊之

本部長

教育支援本部長　高橋　聡
研究・地域連携本部長　渡邊　慶和

[教員の異動等]

退職（平成27年３月31日付け）

看護学部　教授　山内一史
看護学部　教授　土屋陽子
看護学部　講師　安藤里恵
社会福祉学部　教授　青木慎一郎
社会福祉学部　准教授　宮寺良光
ソフトウエア情報学部　教授　柴田義孝
ソフトウエア情報学部　教授　村山優子
ソフトウエア情報学部　教授　澤本潤
ソフトウエア情報学部　講師　小笠原直人
総合政策学部　教授　元田良孝
盛岡短期大学部　教授　佐々木隆
盛岡短期大学部　教授　誉田慶信
宮古短期大学部　准教授　松本力也
高等教育推進センター　教授　ウヴェ・リヒタ
高等教育推進センター　准教授　関根宏朗

採用（平成28年4月1日付け）

看護学部　教授　内海香子
看護学部　助手　鈴木　睦
社会福祉学部　准教授　佐藤哲郎
社会福祉学部　講師　日野原由未
ソフトウエア情報学部　講師　成田匡輝
盛岡短期大学部　講師　パトリック・マーハー
盛岡短期大学部　講師　赤澤真理
宮古短期大学部　講師　谷藤真琴
高等教育推進センター　講師　畠山　大

宮古短期大学部学生赤十字奉仕団が公営住宅の交流会に参加

3月6日、宮古短期大学部学生赤十字奉仕団の学生たちが宮古市の災害公営住宅で住民との交流会に参加しました。これは、宮古市社会福祉協議会および地区町内会による依頼・指導のもとで行っている事業で、宮古短期大学部学生赤十字奉仕団も第１回から参加しています。今年度の第３回となる今回は、住民会議のあと輪投げやカルタで心をほぐし、昼食ではみんなで鍋を囲んで体を温めました。この交流会は、今後も継続していく計画です。

卒業生×在学生で熱く語る「ミライトークカフェ」

岩手県立大学同窓会「素心知困の会」の主催によるカフェスタイルイベント「ミライトークカフェ」が1月30日に開催されました。平成24年にスタートして5回目となる今回は約130名が参加。県内外で活躍する卒業生と在学生たちが、就職や将来、学生時代のことなどをざっくばらんな“本音”で語り合いました。身近な卒業生の身をもった経験を聞くことで、在学生にとっては将来の自分やライフスタイルについて考える機会となったのではないでしょうか。

アメリカの大学生100名と本学の学生たちが交流！

日本政府が推進する国際交流プログラム「KAKEHASHI Project」訪問団（米国のフロリダ大学・ノースイースタン大学・デューク大学・サウスカロライナ大学コロンビア校の学生）100名が12月17日に本学を訪問しました。米国の学生たちによるユニークな大学紹介に続き、本学の学生は地域創造学習プログラムの取り組み、オハイオ大学とのボランティア活動等を紹介。その他、研究室の見学や意見交換を行って交流を深めました。

希望郷いわて国体の冬季大会に本学学生が出場！

第71回国民体育大会「希望郷いわて国体」冬季大会に2名の学生が出場しました。スピードスケート成年女子に出場した総合政策学部の濱田芽生子さんは500mで8位に入賞。さらに2000mリレーでは岩手チーム3番手として出場し、4位入賞に貢献しました。またフィギュアスケート成年女子には社会福祉学部の太田原春菜さんが出場。丁寧な演技で地元の応援に応えました。

「企業と大学のためのインターンシッププォーラム」開催

2月2日に「企業と大学のためのインターンシッププォーラム」を開催しました。フォーラムでは、企業の受入れ事例、産学官連携の先進地域である山口県の取組み、参加学生の本音などが発表されました。後半のワークショップでは大学、企業、行政、支援団体など、県内外から参加した様々な立場の方が一緒のグループとなり、「学生・企業・地域にとって効果的なインターンシッププログラム」について本音の議論を交わしました。

鈴木学長の基礎物理学ブレークスルー賞受賞 特別記念講演及び祝賀会を開催

2月8日に鈴木厚人学長の2016年基礎物理学ブレークスルー賞受賞を記念して、特別記念講演及び祝賀会が開催されました。当日は東京大学素粒子物理国際研究センター長の駒宮幸男氏、ILC戦略会議議長の山下了氏の講演に続き、鈴木学長による「神岡の地でニュートリノを追う　そしてILC」と題した特別記念講演を実施。その後の祝賀会では岩手県商工会議所連合会長や岩手県知事をはじめ県内の産学官各界から約300名が出席し、受賞を祝いました。

地域の雇用創出と学生の地元定着に向け「ふるさといわて創造協議会」を設立

2月17日に盛岡市内で、「ふるさといわて創造協議会設立総会」が開催されました。この協議会は、本学と岩手大学が主体となって申請し採択された文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」において、地域の雇用創出、学生の地元定着、地域が求める人材の育成に向け、高等教育機関、自治体、経済・産業界等が一体となって取り組むことを目的として設置されたもので、鈴木学長が副会長に選任されました。

This is My Action!

OB&OG Voice

大学で学んだことを自分の糧としながら、
様々な分野で活躍する県立大学の卒業生たち。
それぞれの職場や地域で頑張っている
卒業生の「ワタシアクション！」をご紹介しよう。

大学院での学びを臨床と研究に活かし、母親と赤ちゃんのためにできることを。

大学院に通っていた頃は「寝る間を惜しんで勉強した」という延足さん。なにごとにも全力で向き合うことを心がけている。

小さい頃から看護師になることが夢でした。大学への進学を考える際は、保健師という仕事も視野に入れ、両方の勉強ができる岩手県立大学の看護学部へ。でも大学3年の時に、実習で初めて出産に立ち会ったことで、進路を変更。命の誕生にすごく感動した私は、助産師を生涯の仕事にしようと決めました。

卒業後は、独立した産科がある盛岡赤十字病院に就職。とにかく仕事を覚えようと夢中で働いていましたが、就職して4年が経った頃、自分の壁にぶつかったんです。当時、院内の看護研究に取り組んでいた私は、研究の進め方や分析の仕方に確信が持てず、自信を喪失…。しっかり研究に向き合える理論と方法を学びたい、そう考えて県立大学の大学院に進学しました。

希望していた研究の基礎を学びながら、取り組んだ研究のテーマは「娘の出産に立ち会った実母の経験とその意味」。盛岡赤十字病院は里帰り出産が多いので、実母が娘のお産に立ち会うことによる影響や関係性を明らかにすることで、家族ケアにつなげたいと思ったからです。仕事と勉強の両立には苦労しましたが、プラハの国際学会で研究発表を行うチャンスにも恵まれ、多くの学びを得ることができました。

現在は、分娩室に勤務する傍ら、院内の研究委員としてスタッフの看護研究を指導しています。すでに中堅という立場にありますが、いつも肝に命じているのが原点に立ち返ること。お母さんと赤ちゃんのために、自分は何ができるのか。それを一つひとつ大事にしながら、生まれてくる命のために頑張っていきたいと思っています。

ワタシ☆アクション！

延足 玲子 Ryoko Nobeashi
盛岡赤十字病院

1984年生、岩手県盛岡市出身。盛岡第二高校卒業。高校時代は吹奏楽部に青春を捧げ、大学時代も盛岡吹奏楽団に所属し、ホルンを担当した。盛岡赤十字病院に就職後、岩手県立大学大学院・看護学研究科に進学し、平成24年３月に卒業。休日は家事をしたり、カフェでランチを楽しむことが多いが、月１～２回は英会話の勉強もしている。

...See You Next Action!

編集後記

震災から5年が経ち、発災時に各地で支援に取り組んだ学生も、今は社会でそれぞれ活躍しています。特集1で紹介したNPO法人「いわてGINGA-NET」「子どものエンパワメントいわて」は、卒業生が理事に加わり活動を継続。本学や全国の学生ボランティアと被災地をつないできて、2月のシンポジウムでも本学、他大学、そして各地から多くの関係者が集いました。最近、時間と共に震災への関心が薄れる懸念なども耳にする中、彼・彼女らの活動に頼もしさを感じました。(企画室・三輪)

岩手県立大学のホットな情報発信中!

岩手県立大学では、お知らせやイベント情報などをリアルタイムに発信をするためTwitter公式アカウント【@IPU_official】、Facebook、YouTubeで情報提供を行なっています。是非、ご覧ください。

YouTube

広報誌［IPUアクション！］へのご意見・ご感想や、広報に関する皆様のご意見をお聞かせください。
（下記の企画室のあて先までお寄せください）

岩手県立大学 Iwate Prefectural University 企画室
〒020-0693 岩手県滝沢市巣子152-52　TEL.019-694-2005　FAX.019-694-2001
［URL］http://www.iwate-pu.ac.jp/　［e-mail］management@ml.iwate-pu.ac.jp

［看護学部］［社会福祉学部］［ソフトウェア情報学部］［総合政策学部］［盛岡短期大学部］［宮古短期大学部］

発行:2016年3月31日

Copyright © 2016 IPU All Right Reserved.

岩手県立大学の魅力を発信すべく日々活動する学生団体、キャンパスアテンダント(CA)。
そんなCAたちがお送りする、県大生の県大生による県大生の今を伝えるためのコーナーですっ ゞ(*´∀`*)ノシ

ケンダイ広報局 学生★企画

一人暮らしちゃんねる

高校から大学へ心機一転の季節。もちろん環境も変わりますよね！(「･ω･)「
今回は一人暮らしの男女に一人暮らしのヒミツを紹介してもらいました！

↑趣味のものでかためる（バスケ系、フィギュア）のが部屋のこだわりです！

盛岡短期大学部国際文化学科1年 こもりん

食生活は…
外食より自炊の割合の方が多い！
通常:なんでもバランス良く食べる
金欠の時:実家から送られる
米でごはん系が多くなる

おしゃれ系男子なので(笑)→
服のシワなどに気を付けています。
アイロンはまめに使う！

総合政策学部1年 かなち

ご飯をまとめて炊いて、
冷凍にすると楽ですよ～♪
朝が苦手な人はアラームを
何回もセットしておくといいよ！

←友達からもらった石鹸、入浴剤などをインテリアに!!

←家の近くのうどん屋さんが好き！
１人でもよく食べに来ます♪

生協カードはプリペイド式→
いちいちお金を出さなくても
簡単にお買い物できて楽ですよ！

【Twitterアカウント】@IPUCA_ 岩手県立大学キャンパスアテンダント公式アカウント!!
※ツイート内容は大学の公式見解ではありません。大学生目線でCAメンバーがつぶやきます!!ハッシュタグは#ipu_ca

CAST 新年度に向けてこれからの抱負、聞いてみました ┌|^。^|┘

A1:いちご
A2:大きい人参
A3:録画したTVを観ること!
A4:全力で楽しむ!

ソフトウェア情報学部3年
ちぇるしー

A1:きれいな景色
A2:溜まってしまった家事
A3:好きな曲とともに歩くこと
A4:何においても自分から積極的に!

看護学部3年
しょーちゃん

Q1→好きなもの　Q2→嫌いなもの　Q3→ハマっていること　Q4→4.これからの抱負

CAとは？

私たちは高校生と大学生の
架け橋となり、岩手県立大学の
魅力を発信しています。
これからも私たちの活動に
ご注目くださーい☆
4月には新メンバーも募集します!